

## 語用論研究におけるジェンダー

林 礼子

言語研究の始まりは、記号はどのように意味づけされることにより意味を持つようになるのかという素朴な問いからであったが、記号への意味づけのプロセスについての疑問は、今日に至っても言語研究の課題であり続けている。第7回語用論学会シンポジウムは、その答えを求める研究の方法を探るという動機のもとに「語用論とジェンダー」というタイトルを付けた。したがってここでの議論は、語用論研究の立場からジェンダーについて論じるということを目的にしているのではなく、広義において「言語記号の意味づけを探るディスコース研究を展開する」ということを目的にしている。

言葉は民族であり、政治であり、制度であり、歴史であるという認識は、言語を研究するものにとっては自明のこととされているが、言語の研究は必ずしもこの考えにそってなされてこなかった。それは、これらの要素を考慮して研究すると言語を科学的に体系づけることができないという言説が分野において支配的であったことによるものであるといえる。その言説の背景にはソシュールが示した言語観が根強くあることはしばしば指摘されてきた。ソシュールはラングという抽象的概念を呈示することによりこれらの要素を言語学の分野から除外するという研究方法を取ったが、それは言葉を抽象的な理論の枠組みのもとに規則化しようとしたからである。この姿勢は後の言語研究の礎石となり、我々の言語行為や思考は内在化されたシステムによって制約されているという言説を生んだ。また、この姿勢により、言語とコンテキストは切り離され、言外という言葉によってコンテキストを外的要因として扱う言説が作り上げられた。延いて、これらの言説は言語を抽象化することが言語科学であるという言説を支え、言語がもつ社会的意味の研究は非科学的なアプローチであるという言説さえも生むこととなった。

しかし一方でこの言説は、言語を科学的に分析するということは言語を抽象化することではないという言説も生むことになる。ソシュールのラングの呈示は、言語を抽象的に客観化することが言語を科学的に理論化することではないという逆説を可能にしたのである。それは、ソシュールがラングに対してパロールを対峙させたことによって可能となったといえる。例えばロシアのヴォロシノフはパロールと向き合う姿勢を明言した研究者の一人である。彼

は言語をラングとパロールに分離することは紛れもない誤りであると指摘し、パロールこそが言語現象であると捉え、社会で実際に使われている言語を研究の対象に置いた。ヴォロシノフのこの見解は、今日の語用論研究の基本的な共通認識となっており、それに基づいた研究の姿勢は広く周知されていることである。とは言っても、その有効的な研究方法はいまだに確立されるには至らず、現状は多様な理論、モデル、アプローチが林立している。それは、国際語用論学会（International Pragmatics Association）における研究発表の領域が開催ごとに広がりを見せ、社会学、人類学、心理学、文学、コミュニケーション研究、認知科学などの研究者がそれぞれの分野の観点から言語のプラグマティクスを論じる状況を見ても明らかである。語用論研究の多様化が収束を見せずますます拡大している実状は、ソシユールがその重要性を説いたにもかかわらず、除外せざるを得なかったパロールの意味を捉えることの困難さを如実に語っているのである。

ここで繰り返し述べることもないが、パロールを研究することで言語の本質を理解するという語用論の試みは、一見簡単なことを扱っているように思えるかもしれないが、実は、非常にアブストラクトで捉えようのない難しい課題に挑んでいるのである。言葉の意味はその人の心と身体そのものであり、その意味は、テキスト、イベント、状況、他者との関係、社会、そして文化にまで及んだコンテクストのなかで生きている。そしてまたその生きている意味が、これらのコンテクストを生みだし、意味とコンテクストは循環しながら構築される。言葉の意味づけに対するこの見解は、言語研究とは言葉を使うことの意味を現実の出来事（会話、テキストの両方における）として捉える以外にないということを示すものである。それは、現実で使用されている言語表現を部分的に取り出し、モノとして抽象的な概念世界に引き出し、そのモノに対してもっともらしい説明を加え、場合によってはモノだけでなくコンテクストさえも抽象化するという研究姿勢を持つ分野とは一線を画する見解である。この見解が、今日の語用論研究の領域を広げてきたのである。

本シンポジウムは、不変項目とみなされる性をコンテクストの要素として言語の使用に介入させることで、言葉の意味づけのプロセスを言語使用と社会との関係において理解するという学際的アプローチを提案する。そのため近隣の分野から四人の講師とディスカッサントの先生をお招きした。これらの先生は、学界が構造主義を脱して辿り着いた新しい社会思想である構築（constructionism）という概念を視座に、ディスコース（言説）の構築、カテゴリーの構築という枠組みを軸に据えて、言語使用と社会との関係を研究しておられる。また、先生がたは、論点の対象としてジェンダーを選んでおられる。先生がたのご著書を読んで、人は性という身体を事実とみなして言葉を使っているということを見据えて広義のディスコース研究をしておられる、ディスコース研究においてジェンダー現象をはずすことはできないということを深く認識しておられる、と勝手な解釈をさせていただいた。

性とそれによる身体の差異という事実は個人と世界において不変と見做されてはいるが、

ジェンダーの意味は時代や地域の変化とともに変化する。しかし、ジェンダーに志向される意味づけの行為の本質は変化しているのだろうか。そもそもジェンダーを通して言葉を使う、そして、言葉を通してジェンダーを使うという現象はどのような動機にもとづいているのであろうか。こうしたジェンダー志向のプロセスとその志向による言葉の意味づけのメカニズムに対する疑問に答えることは、言語記号の意味づけの疑問を明らかにすることに繋がる。その意味において、ジェンダーは語用論研究の貴重な対象項目である。性への意味づけの行為により性がジェンダーという社会的意味に構築される過程は、まさに言葉の意味づけのプロセスだからである。またジェンダーは、言語を社会、文化、場の状況といったコンテキストの多様な要素との関係のなかで捉えるのにアクセスしやすい対象項目である。言語の使用とジェンダーの関係を研究すると、意味づけと構築という我々の社会的な認知活動が明らかになってくるのではないか。すると、そこから文化と社会と言語は何によって関係づけられているのか、その一端が見えてくるのではないかと考える。

#### 参考文献

- Hodge, R. and G. Kress. 1988. *Social Semiotics*. Ithaca, New York: Cornell University Press.
- 中村桃子. 2001. 『ことばとジェンダー』東京: 勁草書房.
- 小倉孝誠. 1999. 『<女らしさ>は どう作られたのか』京都: 法藏館.
- Saussure, F. de 1974. *Course in General Linguistics*. (ed. by J. Culler, trans. by W. Baskin) London: Fontana.
- 佐竹久仁子. 2004. 「『女言葉／男ことば』規範の形成—明治期若年者向け雑誌から—」『日本語学』23-7, 64-74.
- Voloshinov, V. I. 1973. *Marxism and the Philosophy of Language*. New York: Seminar Press.
- 山崎敬一・山崎晶子. 1994. 「美貌の陥穽 (I, II) —カテゴリーと規範の問題—」山崎敬一 (編著) 『美貌の陥穽』119-198. 東京: ハーベスト社.